

2) 県外漁場における琵琶湖産アユ種苗放流効果の評価

片岡佳孝・白杵崇広・藤原公一・山本充孝・岡本晴夫*¹・酒井明久*¹

【目的】

全国的に冷水病は広がり、河川に放流したアユ種苗の冷水病によるへい死がこれまで多数発生した。しかし、「アユ種苗の取扱いおよび放流に関する留意事項」を守って琵琶湖産アユ種苗を適正に放流すれば、高い生残率を示すことが平成10～13年度の調査で明らかになった。

そこで、その「留意事項」を守った琵琶湖産アユ種苗の放流と追跡調査を飛騨川漁業協同組合（岐阜県）の協力を得て、県外の漁場である飛騨川支流白川で行った（図1）。

【方法】

試験実施河川：木曾川水系飛騨川支流白川の東白川村および加子母村地先流程約10kmの区間

放流日：平成15年5月12日、14日、20日、23日、6月17日、7月8日に複数回放流。

供試種苗：県内業者による仕立て種苗（平成15年2月、3月および5月のエリ漁獲種苗、放流時のサイズ9.5～14.9g、全放流重量950kg、約75,000尾）。

放流日の決定：放流前から河川水温を測定し、日間最低水温が13℃を越えてから放流した。

調査：・潜水目視調査(6月12日)

・生残率推定：標識魚（脂鱗切除2,260尾、平均体重48g）を6月13日に放流し、解禁日（6月22日）の釣獲魚に占める標識魚の割合からピーターセン法で6月13日時点での先に放流された種苗の生息尾数を推定して生残率を算出した。

・解禁日に釣果聞き取り調査（6月22日）

【結果】

〈放流後の状況〉

潜水目視調査ではアユは多数確認され、へい死魚は4尾確認されたのみであった。また組合による連日の漁場監視においても、漁期間中のへい死は確認されなかった。

〈生残率〉

解禁日の釣獲魚のサイズから、釣獲魚（図2）は、5月12日、14日の放流魚と考えられた。そのため、これらの種苗の解禁までの生残率を算出した。その結果、放流日から6月13日までの生残率は94%（95%信頼区間76%～130%）と推定された。

〈解禁日の釣果〉

試験区間（図3）で友釣りをした192人への聞き取り調査の結果、釣果は平均9.8尾／人・6時間（5.4～17.4尾／人・6時間）であった。また、潜水目視調査でアユが高密度で確認された区間の釣果は17.4尾／人・6時間と周辺よりも高かった（表1）。

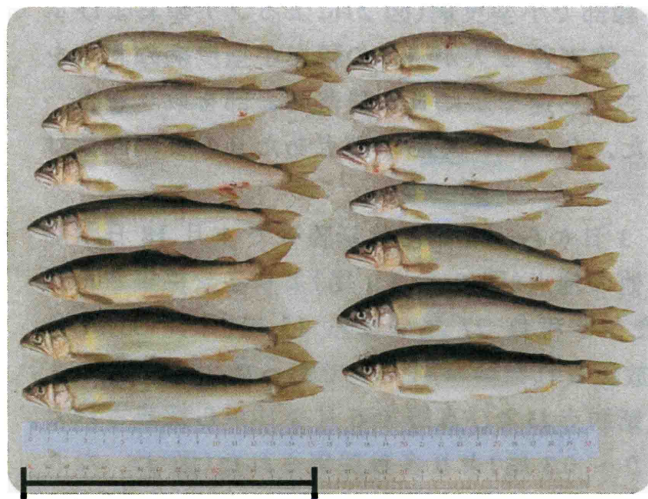
今回の調査では、放流から標識魚放流日（6月13日）までの放流種苗の生残率は高く、放流時水温等に注意しながら種苗を適正に放流すれば、高い生残率を示すことが確認された。

今後は、河川放流用種苗に対して出荷前に加温処理などによる除菌を徹底するとともに、保菌検査体制の整備が必要である。

* 1 ; 水産課



図1 調査漁場 岐阜県飛騨川支流白川



15cm

図2 友釣りで釣れたアユ

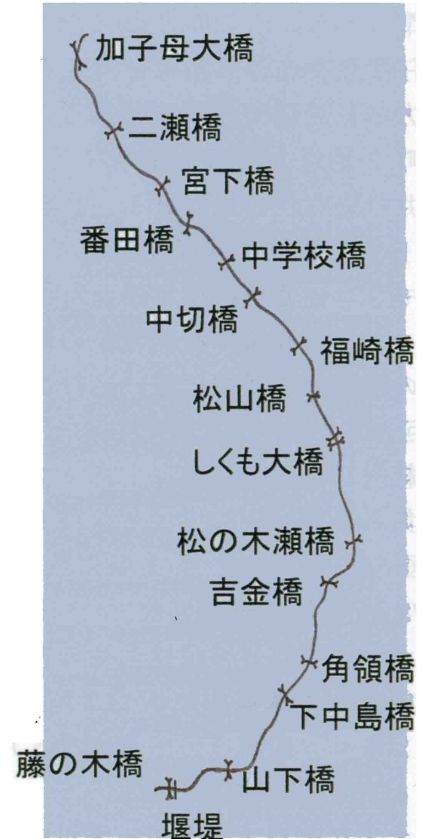


図3 漁場略図(区間長約10km)

表1 漁場内の各区間における平均釣獲尾数

	6時間あたり平均釣獲尾数	潜水目視評価
加子母大橋～二瀬橋	9.3	1
二瀬橋～宮下橋	5.4	3
宮下橋～番田橋	15.6	5
番田橋～中学校橋	17.4	4
中学校橋～中切橋	7.2	3
中切橋～福崎橋	10.8	3
福崎橋～松山橋	8.4	3
松山橋～しもく大橋	12.6	2
しもく大橋～松の木瀬橋	8.4	2
松の木瀬橋～吉金橋	10.8	2
吉金橋～角領橋	7.8	3
角領橋～下中島橋	6.6	3
下中島橋～山下橋	8.4	3
山下橋～堰堤	7.8	2.5
平均	9.75	

潜水目視評価 漁場内の潜水目視観察結果からアユの生息密度を1(ほとんどいない)～5(非常に多い)の5段階で評価した。